

板かるたの古里、会津を訪ねて

—北海道的文化の形成—

河野民雄

道産子の誕生

現在、北海道の人口は約 550 万人で、北海道はその成り立ちから見て内地からの移住者の寄せ集めであるといえる。内地という言葉を軽々に使うべきでないという意見が専門家の間にあることは承知している。私がここで使う「内地」というのは、北海道以外の本州の府県という意味で使わせていただくことにして、それ以上の意図はないことをお断りしておく。

北海道の歴史を知るために、大雑把な時代区分を覚えていただきたい。

江戸時代道南の一部を除いて未開拓の北海道が、明治になって急速に開けて行く。

明治 2 年から 15 年まで北海道を取り仕切った役所は開拓使である。ところがこれがどうも上手くいかないので、北海道を函館県、札幌県、根室県の三つに分け、開拓使の金で造られた国営企業を管理するために、農商務省の北海道企業管理局が設けられた。

明治 15 年から北海道庁が開かれる 19 年までの短い間を 3 県 1 局時代という。しかし北海道を 3 分割しても思わずくないので、明治 19 年以後は現在のように北海道庁という唯一の役所が北海道をおさめることになった。現今の北海道は道州制のお手本のようにも言われるが、少数ではあるが分県化した方が良いとする意見を持つ人もいる。

明治初年の北海道の人口は数万人だった。それがあっという間に大正中期に 200 万人を越えることになる。未開の北海道に内地からドット移住して来たからである。移住には三つの波があった。一つは、1894 年の日清戦争、1904 年の日露戦争、1914 年の第一次大戦後である。大きな戦争は、一部の者を豊かにする反面、この戦争で落ちぶれる人を出す。この 3 つの戦争の後、貧しき人々は未開の北海道を目指した。この間に移住してきたのは地域的にみると、東北地方が 4 割、北陸地方が 3 割、数はぐっと少なくなるが四国地方が 1 割弱である。つまり北海道人のルーツをたどれば、大半が東北・北陸地方出身者ということになる。北海道の文化には東北・北陸地方の影響が強い。

ただ最初に北海道にやって来た人たちは、北海道で一旗揚げて内地に錦を飾ろうという人が多く、土着しようという意欲は薄かった。結局庶民の夢はそう簡単には実現せず、大多数の人はそのまま北海道に落ち着いてしまうことになる。移住 2 代目や 3 代目は、もはや内地に帰ろうなどとはユメユメ思わず北海道が終の棲家になる。こうして、北海道生まれで北海道育ちの道産子が誕生する。丁度北海道で道産子が多数派になったのが、開道 50 周年（開拓使設置が起点）を祝

った 1918 年=大正 7 年頃であった。この頃北海道の人口もようやく 200 万人を少し越え、大正中期に誕生した道産子を中心に北海道的文化が生まれた。

大正中期に制度的にも内地なみの扱い

先ほど「内地」という言葉に対するこだわりに触れたが、「内地」に対する言葉は「外地」である。近代日本の歴史では、沖縄と北海道が外地=内国殖民地として半人なみの扱いであった。北海道や沖縄が制度面でも何とか一人前扱いされたのが大正中期であった。

近代国家の指標のひとつである国会議員の選挙、地方議会の開設、徵兵令の施行などは内地より遙かに遅く、北海道・沖縄でこれらの全てが実施されるのは次のように、大正中期になってからである。つまり道産子の誕生と時期的にはほぼ一致する(『北海道の歴史下』、100 頁参照)。

① 国会議員選挙

内地は明治 23 年、北海道一部で 35 年、全道 37 年。沖縄一部で 45 年、全県大正 8 年。

貴族院の多額納税議員選出、北海道と沖縄ともに大正 7 年。

② 府県会の開設

内地府県明治 11 年、北海道明治 34 年、沖縄明治 42 年、参事会設置北海道大正 11 年、沖縄大正 9 年。

③ 徵兵令

内地府県は明治 6 年。北海道は明治 22 年道南で実施、31 年全道で実施。沖縄は先島を除く実施が明治 31 年、沖縄全県実施が明治 35 年。

開拓当初はお国（出身地）の文化丸出し

ひと旗あげて故郷へ錦を飾ろうとした移住 1 世の人（私の祖父母）にとって、北海道は仮住まいの地であった。純粹の北海道生まれ北海道育ちの私の父（移住 2 世）や私のような移住 3 世にとって、ここがわが古里であり内地は単なる祖父母の思い出の地に過ぎない。

大正中期になり、道産子の間に道民としての共通の言語や意識が形成されて行く。その象徴は北海道方言の誕生である。明治 32 年に最後の屯田兵として士別にやって来た屯田兵は、わずかに 100 戸だが、20 数県人で構成され最初は言葉が通じず外国人と話しているようであったと聞いている。しかし、私のような移住 3 世の道産子には、「しばれる」「あずましい」「いづい」「めんこい」「こわい」などが共通語になり、北海道に一種の言語文化圏が生まれた。

ただしここでいう文化とは、高尚で堅苦しいものではなく外国はもとよりのこと、国内でも所変われば風俗習慣も異なる、いわゆる「カルチャー・ショック」などといわれる時の「カルチャー」に相当する言葉と理解いただきたい。

北海道は内地人の寄せ集めであったため、入植当時はそれぞれがお国（故郷）の文化のままに生活していたのである。食べ物も出身地でそれぞれ異なっていた。それが良く現れるのが年中行事に伴う食べ物である。現在では食べる人が少なくなってきたとはいえ、それぞれのお国独自の食べ物の名残が感じられるのが、お正月の雑煮である。先ず基本の汁が、醤油味、味噌味、塩味、汁粉と様々であり、中に入る具も大根、ニンジン、海産物と多様だ。肝心の餅も、丸餅、角餅、あんこ餅、またその餅を焼いて入れるか、そのまま煮込むかによって、それぞれのお国柄が分かるといわれる。私が行ったアンケートによると、70歳以上の人のはほとんどは、正月の三が日のうち少なくとも1回は雑煮を食べている。

私は主として北海道の屯田兵を研究している。札幌市内に最後に入った篠路兵村（現札幌市北区屯田町）が、先年『屯田兵物語』を刊行した。明治21年に札幌市の北西部に入った篠路屯田（220戸）は、福岡県、石川県、福井県、山口県、和歌山県、熊本県、徳島県の7県から応募している。この本の最後に、屯田兵の言葉と雑煮を取り上げている。詳細を述べる紙幅がないのが残念だが、最後にお国言葉と写真入りで出身地によって雑煮にも違いがあること紹介しており、わが意を得た思いである。

北海道独特の板カルタ

現在も内地で一般的に行われている上の句カルタは、小倉百人一首の上の句を読んで、下の句の札を取る。しかも読み札も、取り札も紙製であり、書体も普通の活字である（ただし、漫画・映画『ちはやふる』は、上の句競技カルタが主題なので丈夫な特殊な素材を用いており、畳の上の格闘技の感がある）。

明治中期から戦後の昭和30年代初頭まで、お正月を中心とした冬の室内遊戯として、北海道で老若男女を問わず盛んだったのが百人一首であった。北海道の百人一首は、読み札は紙製で下の句を読んで、独特の草書体で書かれた下の句の取り札を取る。その取り方が尋常でない。荒々しくて一種の格闘技である。取り札は朴（ほう）の木製が多いが、初期には桐製のもあったらしい。

取り札が北海道と同じ板に書かれたいわゆる板カルタは、福島県の会津地方が発祥の地と考えられている。会津の下駄、あるいは会津塗の重箱やお盆の半端材を使ったようだ。最初は手書きで大きさもまちまち、その後印刷された規格品となる（厚さ5ミリ、縦75ミリ、横50ミリが一般的）。

肝心の会津地方では昭和初期まで板製のカルタ取りが盛んだったが、現在は行われておらず、たまに博物館に寄贈されるだけだという。年配の人で、昔北海道で板カルタをやったことがあるという人は結構いるが、板カルタが北海道独自の遊戯だと知る人は少ない。

『八重の桜』の新島八重さんは、明治時代京都で下の句カルタの名人

NHKの日曜ドラマ「八重の桜」の主人公、会津出身の八重さんは下の句カルタの名人だったといわれる。新島に先立たれた未亡人の八重さんを慰めようと新島の教え子が、正月の土・日曜日などにしばしば訪れ、京都の八重の自宅でカルタ会が開かれた。もちろん下の句を読んで板に草書体で書かれた木の札を取る会津のカルタである。初期の会津式のカルタは、5対5の対抗であったようだ。従って、本格的な板カルタをするには、読み手1人を加えて11人が必要と言われる。(同志社女子大学国文科教授吉海直人「板かるたの歴史—会津発祥地の検討」、同大「日本文学」25号、2013年)。

板カルタは、いつ誰が北海道に伝えたか

通説では、明治以降に北海道開拓に渡道した会津地方の移民が北海道に伝えたと考えられている。

明治8年に入った最初の屯田兵琴似、もしくは翌年の山鼻屯田兵村が有力候補である。ただし、明治初年北海道開拓のため会津地方から余市や小樽に移住した会津士族がおり、これらの人人が伝えたと考える人もいる。

旭川市在住の板カルタ研究家宮野勝氏は、開拓移民は娯楽品を持ちこみ、これを享受する余裕などなく、彼らがもたらしたのではないという。昨年9月琴似でこのことを話したが、私もこの宮野説に同感である。琴似の屯田兵4世に当たる方も、かつて琴似でも板カルタは盛んであったが、それは他の地域並みということで、琴似だけが突出して盛んだった訳ではない。ましてや、最初は開拓に忙しくて娯楽どころではなかった。

私が生まれた士別は最後に屯田兵の入った所である。今ではすっかり陰が薄くなつたが、かつて士別兵村近くの神社のある鎮守の森は桜の花見の名所であった。昭和40年頃士別で屯田兵を囲む座談会があり、誰かが「屯田兵の皆さんもお花見をしたのでしょうか」と尋ねると、ある屯田兵が憤然として「開墾が忙しくて、花見なんて優雅なことはできませんでした」と答えたのを思い出す。

北海道の開拓に来た人に、娯楽に板カルタをやる余裕などなかつたはずである。ましてや北海道に移住する人には荷物の制限もあった。

阿部綾子氏(福島博物館学芸員)によると最近福島県を始め東北地方各県で、江戸末期の板かるたの発見が相次いでおり、博物館に寄贈されることも多いという(『北海道新聞・夕刊』、平成27年3月10日付)。また宮野氏によると、幕末から昭和初期にかけて会津地方で板カルタが盛んであったという。ただこの地方でも、昭和以降には板カルタは余り行わなくなり、現在の会津地方在住者は昔の記憶すらない方が多いという。

板カルタは、幕末蝦夷地の警備に来た会津藩士がもたらした一宮野勝説

現在のところ板カルタをもたらしたのは、誰であるかは謎である。

仮に会津が発祥地とした場合、宮野氏は幕末に蝦夷地の警備に来た会津藩士がもたらしたかもしれないという。この説は説得力がある。宮野説の根拠は以下の通りである。

- ① 1810 年、利尻、礼文、稚内に 10 年間くらい居たが、冬の寒さで病に倒れるもの多く遊ぶ暇などなかった。
- ② 1859 年、根室標津から紋別までのオホーツク沿岸の警備を担当。武官 200 名、文官 176 名が派遣され、戊辰戦争敗戦までいた。冬の夜長を下の句カルタに興じていたのでは（当時の会津藩の分担地域は、『北海道の歴史・上』、439 頁の地図参照）。

発祥地は会津であるが、もたらしたのは会津人にこだわらない方が良い—河野説

最近では、板カルタの発祥地は会津地方という説が有力である。

北海道博物館学芸員池田貴雄は、北海道の民具の研究家であり『なにこれ、北海道学』の著書もある。彼はかつて北海道で盛んであった板カルタの発祥地を会津か金沢（石川県）とみて、板カルタ 1 枚をポケットに入れて、玩具店、木を扱う工具店、はたまた骨董店を訪ねた。その結果、会津地方には残っていたが、石川、富山、福井県などでは「そんな木の札の百人一首など見たことがない」といわれたという。会津発祥説の根拠である。宮野氏も裏日本各県の図書館に問い合わせた結果、同じような答えが返ってきたという。

私はもう一度裏日本各県の新聞で一斉に板のカルタをした、あるいはしているのを見た体験者募ったら正反対の結果が得られるのではと思っている。

北前船との関連も視野に会津訪問

現に私の周辺には昭和 9 年生まれで、金沢の郊外出身者がおり、お嫁に来る前に石川県で板のカルタをとった記憶のある方もいる。阿部氏によると、最近では福島県のみならず、東北地方の裏日本で古い板カルタの発見が相次いでいるといわれる。宮野氏の研究では、古くに島根県で板カルタを見たという証言もある。もし日本海沿いのいわゆる裏日本が発祥地であるなら、宮野氏が仮説として述べた北前船との関連も考えなければならないだろう。

そのことは平成 27 年 9 月、北海道で最初に屯田兵が入った琴似で板カルタの話をした時に耳にした次のような話とも関連する。

「板カルタの発祥地は、多分会津地方である。ただ会津の出身者が北海道開拓に入った時にもたらしたとは限らない。先ほどの話でも板カルタは島根県や石川県を始め、東北地方の日本海沿

いの県で行われていたようである。そうだとすればやはり北前船との関連を考えざるを得ない。北前船の船中で退屈しのぎに最初は紙のカルタを取っていたが、船中なので不安定のため木製の札を取るようになった。この見解は説得的であるが、残念ながら裏付けがない。

最近筆者はたま会津を訪れる機会があった。平成 28 年 4 月同地を訪れ福島市に向かうバスの車中で隣席の人から次のような話を伺った。

現在の会津若松市の室井市長の実家は元会津塗の問屋だったはずである。室井商店に長く勤めて、その後独立した人から聞いた話では、「もともとは船カルタとよんでおり、木の箱に入っていて取り札も木製なので、船が沈んでも浮き上がってくるところから名づけらしい」ということである。この話だけでは即断できないが、最初船（ふな）カルタとよばれたらしいこと、もしかしたら北前船と関係ありそうに見受けられることである。いずれにしても、北海道人のルーツは北陸・東北地方なので、板カルタをもたらしたのは会津人にこだわる必要はなく、北前船がもたらした可能性も否定できない。

それにしても内地発祥の板カルタが、かつて冬季間の北海道で盛んに行われ、現在も細々と受け継がれていることを銘記すべきである。娯楽が多様化してきているとはいえ、北海道独自の文化として板カルタは発展させるべきであると考えている。

先ほど 70 歳台の方約百名の前で北海道独特の百人一首の話をさせていただいた。予想通り、下の句を読んで、下の句を草書体で筆太に書いた板のカルタを取る遊びが、北海道だけで行われていたことを知る人はほとんどいなかった。貴方は小さい頃板カルタをしたことがありますかと問い合わせたら、8 割方の人がやりましたと答え、中には懐かしそうに具体的やり方まで懇切に答えてくれた人もいた。私が印象的だったのは、2 人のご婦人が今でもお正月に孫と板カルタをしております。学校でもやっているようですよ、と元気に答えてくれた。嬉しい限りである。

(本稿は平成 24 年 6 月、月寒公民館で創造学園の皆さんに行った講演、同年 8 月北京大学術交流会館で、全国盲学校社会科教員研究会で行った講演、ならびに平成 27 年 4 月、月寒公民館で再度行った創造学園の皆さんへの講演に、同年 9 月、琴似のレッド・ベリー・スタジオで行ったトークサロン 140 での講演など、最近の知見をもとに補筆して作成したものである)。